

# 第11回「日本語大賞」

テーマ「美しい日本語」

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

## 「柔らかくて温かい言葉」

東京都  
東京都立広尾高等学校  
2年 ミノヴィッチ たまら

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

私の父はセルビア人です。三十年前に国費留学生として来日し、今では日本語の新聞を読み、日本語での会話や読み書きに困ることはほとんどありません。日本での生活の中で自分の知らない漢字や言葉に出会うと辞書で調べたり、ノートに書き記したりすることも変わらず続けていて、現役学生である姉や私よりも日本語の勉強に熱心です。ヨーロッパ出身者には2〜3ヶ国の言語を話せる人は珍しくはないと聞きますが、マルチリンガルの父は日本の言葉が美しく興味深いと言います。

思い起こせば、家族間の会話で母国語の違う父に説明しにくい日本語のニュアンスは沢山ありました。説明する側の私たちは身振り手振りで擬音語や擬態語まで駆使してどうにか分かってもらおうとするのですが、それがまた大変です。私たちの言葉の響きが可愛くて面白いと笑い出してしまうからです。さらに父に指摘されるまで意識もしていませんでしたが、私達の会話は朝から晩までオノマトペを使いまくっているようです。擬音語は他の国でも使われるようですが、犬が吠える、電車が走るなど主に小さな子供向けの表現として使われることが多いのだそうです。

しかし実際、オノマトペはとても便利なものです。歯医者に行った時、自分の痛みを正確に伝えようとすると「ズキズキ」「ジンジン」「ズキンズキン」「ガンガン」というと医師は理解してくれます。痛みの種類と程度を伝えられてとても便利です。

他にも私の口癖がありました。「かもしれない」「かも」です。断定はできないけれど、その可能性があることを表す言い方です。これも指摘されて初めて「ああ、本当だ」と思いました。文章としてはなく普段の会話の中で使う言葉はほとんどが無意識です。

そういえば日本語は断定することを極力避ける工夫が随所に見られます。他の外国語と違ってこの点は曖昧な言い方の多さにあるのかもしれませんが。相手に不愉快な思いをさせたくない、相手との関係を良好に保ちたい、争いの元を作らたくないという考え方があってしょうか。そもそも日本人は多くを語らぬことを良しとしている節があります。それは「言わぬが花」「口は災いのもと」「不言実行」「暗黙の了解」などの多くの諺や語句があることが示しています。雄弁であることが賞賛される欧米とは違って、海外の人から見れば日本人は無口でシャイだと思われているでしょう。

しかし、多くを語らない反面、日本語に感情を伝える為の言い方が数多くある事には驚きます。他言語よりも気持ち伝えることに関してはより熱心かもしれないと思います。日本語には心や胸という言葉を含んだ表現が多いからです。

例えば「胸をなでおろす」という言葉は胸に手を当ててホッとしている様子が目に浮かびます。「待つてます」と言わず「心待ちにしています」だと、言われた相手もこちらも温かい気持ちになります。他にも心温まる、心を通じる、心が晴れる、心が狭い、心配り、胸を打つ、胸に迫る、胸に沁みいるなど思い出せる範囲でも沢山あります。

これらは日本固有の大和言葉です。独特の柔らかさと温かさが特徴で、情景や人物像が頭の中に浮かんでくる、思いの強さや様子が伝わるような表現です。

自分の気持ちを誰かに伝えたいという衝動が起きた時に、それを言葉にして誰かと共有したいと思うのは人間の究極的な欲求です。いい景色を見た時、心地よくてたまらない音楽を聴いた時、あるいは一口で幸せになるような美味しいものを食べた時、このような優しい言葉で人と繋がれるよう

になりたいと思います。日本語は美しく、そして柔らかくて温かい言葉です。